

# 結婚という装置

—— フラーからハーストンへ ——

伊藤 淑子

## はじめに

ラルフ・ウォルド・エマーソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) を中心として、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-62) をはじめとする白人男性知識人たちによって繰り広げられた超絶主義のうねりのなかの紅一点的存在といえるマーガレット・フルー (Margaret Fuller, 1810-50) と、文化人類学の研究者としてアメリカ南部、ジャマイカ、ハイチに伝わる黒人フォークロアを収集し、黒人女性作家の祖とも呼ばれるゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston, 1891-60) とのあいだに、直接的な関係性を見出すことは困難であるように思われる。両者が女性であるということ以外、白人と黒人、上院議員も務める知識人階級エリートの父と牧師兼大工の労働者階級の父、19世紀と20世紀、ピューリタンの伝統の残る北部東海岸と黒人奴隷制廃止後も人種問題が蔓延する南部、といったように、人種も階級も時代も地域も正反対の二人のアメリカ人女性作家である。

しかしその二人の作家に、何かしらの共通点が探せるとすれば、興味深いことではないだろうか。時代も文化的背景も異なる二人の作家が目指すものは、文学の究極のテーマともいえる魂の解放であるが、とりわけ女性をとりまく環境に注目するとき、その精神的な解放を実現するための方法として、フルーもハーストンも異性愛主義的な結婚に可能性を託すのである。フルーとハーストンが描く女性たちは、それぞれに制約を受け、その制約を超えて自己を解放することを希求する。それをもたらすものとして結婚を想定することは、結婚制度こそ女性を性別分業的な役割にとどめる元凶であるという

1960年代にはじまる第二派フェミニズム以降の問題意識からすると、目的と手段の相反性が著しいといわざるをえない。フラーとハーストンがともに、異性愛の精神的成就をメタファーとして、女性の全人格的な調和を表現しようとするのはなぜなのだろうか。

フラーとハーストンは、結婚をとおして女性の自己実現と解放がどのように可能になると考えたのであろうか。本論文においては、フラーとハーストンがそれぞれにどのような女性の困難を描き、そこからの脱却と自己解放の可能性をどのように見ていたか、また結婚制度が女性の解放の手段になるとすれば、どのような条件においてであると考えていたか、結婚という経験がどのような利点を女性にもたらすことができると考えていたかを、フラーの『湖の夏、1843年』(*Summer on the Lakes, 1843*, 1844)と『19世紀の女性』(*Woman in the Nineteenth Century*, 1845)、ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』(*Their Eyes Were Watching God*, 1937)を取り上げ、それぞれの代表的な著作から分析したい。

## I 自己信頼とジェンダーの矛盾

フラーのメンターともいえるエマーソンは、「自己信頼」において、自分自身のなかからしか自分を支える力を得ることができないことを、具体的な例を挙げながら説明する。

A man is relieved and gay when he has put his heart into his work and done his best; but what he has said or done otherwise, shall give him no peace.(121)

二 心をこめて全力で仕事を成し遂げるとき、精神が解放され、達成感を得ることができるが、全力投球をしたという実感がないのに何かを成就したという確信を得ることはむずかしいという、誰もが経験したことのある感情を入口に、エマーソンは超越的な自己認識へと議論を導いていく。

自分自身の実践と自分自身の達成感にしか、自分の力の根拠がないことを示して、エマーソンは自分自身を信じることを説く。

Trust thyself: every heart vibrates to that iron string. Accept the place divine Providence has found for you; the society of your contemporaries, the connection of events. Great men have always done so and confided themselves childlike to the genius of their age, betraying their perception that the absolutely trustworthy was seated at their heart, working through their hands, predominating in all their being.(121)

自分自身を信じること、そして自分の置かれた場所を受け入れること、自分の存在こそが信頼の絶対性を意味していることをエマーソンは求める。

しかしこの楽天的な自己信頼はすべて「男」を主語に語られていることにも注目したい。英語の「Man」が集合名詞として「人類」を表すという文法的な説明はここには当てはまらない。一般化された一人の男と複数化された男たちは、そのなかに女性が含まれることを拒む表現であるといえる。

このことはエマーソンを批判するために述べているのではない。19世紀の思想は人間とは男性であるという前提で展開してきたのだし、エマーソンはフェミニズムを自分自身の欲求として感得する必要がなかった。エマーソンにとって人間は男性のことであるという思想的な環境は当然のものであった。かといってエマーソンが女性の権利に対して積極的に反対の立場に立ったわけでもない。「女性」と題された講義において、女性は自分の政治的な意見を父親または夫に語るができるし、その意見をもとに男たちが投票や政治的役割を果たすならば、女性の意見も政治に反映されると論じている。

The new movement is only a tide shared by the spirits of man and woman; and you may proceed in the faith that whatever the woman's heart is prompted to desire, the man's mind is simultaneously prompted to accomplish.

女性の「心」が望むものを男性の「精神＝頭」は自動的に感知し、女性が欲することを男性はやり遂げようとするというのである。

エマーソンにとって、あえて投票権を要求する必要のない女性、周りの男性に十分に倫理的な感化力を発揮することのできる女性こそが「真実の女性」である。

Let us have the true woman, the adorning, the hospitable, the religious heart, and no lawyer need be called in to write stipulations, the cunning clauses of provision, the strong investitures;--for woman moulds the lawgiver and writes the law.

女性が美と善と信仰を体現する存在であるならば、同時に立法者でありうるというのがエマーソンの理想とするジェンダー観である。

エマーソンの仕事が理想を語ることであったとすれば、このジェンダーシステムが遜色なく機能するかどうかを問うことはエマーソンの責任ではないのかもしれない。代わりに、このシステムを機能させることがいかに困難であるかを直視し、それでも理想的な男女の補完的關係性の実現をあきらめなかったのが、超絶主義の時代を生きたフラーであるといえる。

## II 補完的ジェンダーの挫折

フラーが『湖の夏』で描く辺境に生きる女性たちは、エマーソンの説くジェンダーシステムのありえない理想に裏切られた女性たちであるといえないだろうか。エマーソンに推されて超絶主義の機関紙『ダイヤル』の編集に携わっていたフラーであるが、それを辞し、イリノイ州、ウィスコンシン準州をめぐる旅行に出発する。そのあいだの見聞に基づいて書かれたのが『湖の夏』である<sup>1)</sup>。エマーソンの説く超絶主義的な理想の生活を実験するためにウォルデンの森で2年を過ごしたのがソローであるならば、フラーの辺境の旅は、エマーソンが理想とする男女の關係性の実現がどれほどの可能性をも

つものであるかということの实地検分であるといえる。

このなかで描かれるマリアナとフレデリカは、ともに精神のバランスを失って自滅の道をたどる<sup>2)</sup>。その原因は結婚の失敗である。エマーソンの説くように、妻の思いを察知し、その真意を夫婦が共有する声として世間に向かって発することのできる夫が身近にいるならば、たとえ自分自身の声をもたなくてもマリアナとフレデリカは遠い辺境の地で、自分の人生を全うする日常を得ることができのかもしれない。孤独と疎外に苦しまなくてもすむのかもしれない。しかし自分の内面が理解されず、物質的な意味でのパートナーであることだけを求められるとき、マリアナもフレデリカも救いのない絶望に陥るほかないのである。

精神的に共感することを求めるマリアナと、堅実な開拓者の生活を物理的な協働で築くことを求める夫のあいだの溝は広がり、辺境の空間はマリアナにとっては逆説的に窒息しそうなほど息苦しいものとなる。フラーはマリアナをギリシャ神話のカッサンドラにたとえる。女学校でもマリアナの才気活発さは受け入れられず、辺境での結婚生活に託した夢は、夫が語る世俗的な望みと交わることはない。

フレデリカの葛藤も結婚生活における夫とのすれ違いから発生するものである。勤勉に労働に励む夫に、責められるべき瑕疵があるわけではない。むしろ外から見れば非の打ち所のない夫であるからこそ、フレデリカは夫を非難することばを見出すことができず、自分の満たされない心の所在を言語化することができない。フレデリカを疲弊させるのは肉体的な労働ではない。フレデリカの精神を萎えさせ、固い殻に閉じ込めるのは、開拓者としての夫の勤勉さにほかならない。自分自身の洞察力が評価されず、精神的内面を共有する相手の不在は、フレデリカにも大きな絶望をもたらす。

エマーソンが主張するような一つの声をもつ夫婦の関係を見出すことは容易ではないことを、フラーの『湖の夏』は実証する。ソローが『ウォルデン』において精神的に充足する境地を描き、エマーソンの思想が実生活において実現する様を描写しようとしたのとは正反対であるといえるだろう。

### Ⅲ 理想の関係の追求

それでもフラーが超絶主義的な思考回路から外れたのではないことを、『19世紀の女性』は示している。アメリカにおける最初のフェミニズムの本とされる『19世紀の女性』は、女性に対する不当な扱いを糾弾すると同時に、オールラウンドな女性の力を発揮するための場として、理想の結婚を説くのである。現実を鋭い観察力で分析するリアリストの目と、「真実」であることが唯一絶対の基準であるロマンティックな理想主義者の目が交差するのが『19世紀の女性』であるといえる。

フラーが『19世紀の女性』で理想の関係として取り上げる夫婦をここですべて列挙することはできないが、主だったものは、ギリシャ神話のオルフェウスとユーリディス、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』のブルータスとポーシャ、実在する思想家ウィリアム・ゴドウィンとメアリ・ウルストンクラフト、ジョルジュ・サンドの『モープラ』のモープラとエドナ、クセノフォンの『キュロスの教育』のキュロスとパンシア、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』のヴィルヘルムとマカリア、という具合である。パンシアは夫にただ従い、傷ついた夫の遺体を修復し、ひたすら耐える。マカリアは女性遍歴を重ねたヴィルヘルムを寛容に迎える。これらを一心同体の男女の絆の理想的なかたちであるとするにはいささかの疑問が残るが、フラーが部分的な要素を手掛かりにしても、実在の男女や創作上の男女に、心と精神を通い合わせた理想的な男女の関係性の樹立の可能性を立証しようとしていたことはまちがいない。

それはフラーがエマーソンの超絶主義的な思考の磁場のなかにいることを明確に示している。ピューリタンの原罪意識からもヨーロッパの権威からもアメリカを解放し、真実を追求することは自己を信じることでであると説くエマーソンが、人間を「男」によってのみ代表させるとき、そして身近な「男」を通じて女性の思いが実社会に反映されると詭弁を弄するとき、歴史とフィクションのなかに、そのような「男」の存在を得て自分自身を遺憾なく発揮することに成功した女性を探し、彼女らがいかなる力を見せることができたのかを確認するほか、女性の力とはどのようなものであるかということを証明す

る方法をフラーがもちえなかったとしても、不思議なことではない。

それはフラーの限界であると同時に、エマーソンの限界でもある。エマーソンの「言語ゲーム」のなかに存在するのは、男性によって自己実現を果たす女性を表すことばだけである。そして、超絶主義という時代の思潮のなかで育んだ知的な資産を放棄せず、かつ、女性もまた「男」として表出される者が保有する人格を主張する権利を認められなければならないとフラーが主張するとき、フラーには矛盾するベクトルを同時に実現することばと論理が必要になる。結果的に『19世紀の女性』は遺伝子の螺旋のようにねじれた展開をし、理想の女性のあり方は「最高」の夫を得た妻であることになる。

『19世紀の女性』は次のように締めくくられる。

So shalt thou see, what few have seen,  
The palace home of King and Queen.(105)

ほとんど誰もまだ見たことのないもの、それは「王と女王の宮殿のような家庭」にほかならない。ここにフラーの真意が現れているといえる。『19世紀の女性』でフラーが理想の具現的な例として取り上げたキュロスとパンシアも、ヴィルヘルムとマカリアも、ブルータスとポーシャも、クセノフォンやゲーテやシェイクスピアの残した原典において理想的な関係を築いたとはフラーは思っていないのである。そのことは百も承知で、フラーは自分の著作において、その関係性の理想化を図ったのである。そのことによって、誰もまだ見たことのない絆を可視化し、複数の男女を王と女王の宮殿の入り口に立たせたのである。フラーにとって言説の制約のなかで示しうる女性の権利の実現の具象化が、宮殿のイメージであり、王と一体化した女王というメタファーが示すものこそ、女性の全能性であるといえるだろう。

#### IV 変化を育む繭としての結婚

「男」であることを前提条件にして自己信頼を説くエマーソンがあって、

「男」と一心同体の絆を精神的に得ることによって「真実」を理解し、全能の自己を得ることができると論じるフラーがあるのに対し、ハーストンは『彼らの目は神を見ていた』において、結婚を何度も経ることによって最終的に自分一人で自己を肯定する地点にたどりつく主人公を描く。フラーが同時代の思潮の構造から自由ではなかったのと同様に、ハーストンもまた女性の自立の可能性をストレートに描くことはしない。主人公ジェイニーは結婚を経験するごとに、その結婚生活、夫との関係性から新しい自己を獲得するのである。幼虫から成虫への変態の過程を保護する繭のように、結婚生活はゆっくりとジェイニーを変化させる。

『彼らの目は神を見ていた』というタイトルに現れる「神」が何を意味しているのかを、作品は最後まで明らかにはしない。人間の理解を超えた次元で示されるアポカリプスのように、大洪水の災禍のなかでじっと目を凝らすジェイニーたちに何が見えたのかは、ことばで著されることを避けることによってこそ、もっともたしかにその本質が伝えられるものであるといえるのかもしれない<sup>3)</sup>。それが不可視の真実であるなら、視線のその先にあるものを描写することはできず、凝視する視線の存在を描くことしかできない。

ハーストンが描くのはフロリダの黒人社会である。物語の主要な舞台の一つであるイトンヴィルはアメリカで最初の黒人だけの町であり、ハーストンが幼少時代を過ごしたところである<sup>4)</sup>。トルーベックによれば、イトンヴィルは3マイル平方の広さで、現在の人口は2400人、車なら3分で通り過ぎることのできる規模である(39)。ジョー・クラークがタウンマーシャルとして黒人だけの町を作るための州の特許を得て、白人ジョサイア・イトンの援助を得てイトンヴィルは実現した。

『彼らの目は神を見ていた』でハーストンは登場人物のそれぞれの肌の色を丁寧に描写する。黒人であるということが外見によって括られたカテゴリーであるならば、自分の外見を受け入れることによってしか自己の解放はありえない。ハーストンは肌の色で登場人物を位置づけ、自分の外見を否定し、あるいは偽って、外見の規定から外れた存在になることを目指す者に対して過酷な結末を用意する。これはエマーソンの自己信頼に対するアンチテーゼであるともいえる。無色透明な身体性を前提として自己を信頼するこ

とができるのは白人であるからにはほかならない。黒人の身体は、精神性の前景に立ちはだかるものである。

身体的な存在として黒人である自分を受け入れ、「男」を人間とする言語体系から排斥された存在として女性である自分を受け入れ、そして自分自身によってのみ立つことのできる者になるために、ジェイニーは結婚を遍歴する。両親を知らず祖母によって育てられたジェイニーは、食べるに困らない土地を所有する夫を得ることが幸せであるという祖母の考えにさからえず、ローガン・キリックスと結婚する。この結婚でジェイニーが得るのは、祖母の考えからの解放である。愛のない結婚であっても、ジェイニーは次のステップを踏み出すチャンスをこの結婚によって得る。

まもなくジェイニーはジョー・スタークス<sup>5)</sup>と出会い、駆け落ちをする。ジョーが購入したイトンヴィルの土地はまだ整備されておらず、ジェイニーを失望させるが、ジョーは徐々に土地を買い、中心となって町の機能を整えていく。市長に選ばれたジョーはイトンヴィルの名士という自意識をもつようになり、ジェイニーにも妻としてそれにふさわしいふるまいを求めるようになる。体面を保つために表で会話に加わることも禁じられたジェイニーがふたたび自由を獲得するのはジョーの死によってである。この結婚はジェイニーに多額の財産を残すことにもなる。

ジェイニーがイトンヴィルを離れ、3度目の結婚をする相手はティーケイクである。暮らしていくのに必要な分だけの労働をし、それ以外は束縛を受けず遊んで暮らすという場当たりの生活スタイルを実践するティーケイクの価値観は、ジェイニーの目には新鮮に映るが、このような生活に喜んで身を投じることができるのも、ジョーの残した財産が銀行口座にあるからにはほかならない。将来的に金銭的に困らないという見通しがあればこそ、ジェイニーはその日暮らしの生活を楽しむことができる。

金銭的担保はジェイニーにありのままの自分を探求することを可能にする。ジェイニーは最初の結婚で家族の干渉から逃れ、二度目の結婚で豊かさや地位に伴う家父長的な権力に遭遇し、三度目の結婚で束縛を排除する生活スタイルを経験する。それでは三度目の結婚が理想の実現であるかという点、そうではない。物語はそこで終わらない。

ジェイニーとティーケイクの結婚生活に洪水が襲いかかり、ジェイニーを助けようとしたティーケイクは狂犬病の犬にかまれるという災難に遭う。ジェイニーが欲するあらゆるものを提供したかのように思われるティーケイクに対して、狂犬病に感染するという結末は、あまりにも過酷であるといえるかもしれない。意識のコントロールを失ったティーケイクはジェイニーに暴力をふるい、ジェイニーは自己防衛としてティーケイクを殺す。物語はなぜティーケイクを殺さなければならなかったのだろうか。

その答えはジェイニーがティーケイクの死後、罪に問われず釈放され、イートンヴィルに戻って親友フィービーに語ることに探ることができる。

“...h'm back home agin and Ah'm satisfied tuh heah in mah house and live by comparison. Dis house ain't so absent of things lak it used tuh be befo' Tea Cake come along. It's full uh thoughts,....”(191)

イートンヴィルに帰り、ジョーと暮らした家に落ち着いたジェイニーは、満ち足りた感覚のなかにいる。そして作家ハーストンと語り手とジェイニーの声が一体化する。ジェイニーがフィービーに語ることは、ハーストンが読者に語ることである。ティーケイクが来る前の空虚さもなく、思いに満ちた家に、ジェイニーは一人で暮らしている。もはや祖母にも、最初の夫にも、ジョーにも、そしてティーケイクにも、ジェイニーは頼る必要がない。

祖母と暮らしていた少女時代にミツバチの羽音によって引き出された内面からの衝動を、ジェイニーは完全に自分のものとしたといえる。そのときには内側から湧き上がる衝動を性的なものにとらえ、身近な少年との性的な交渉という方法によってその衝動を受け止めるほかなかったのに対し、三度の結婚を経験してイートンヴィルに戻ってきたジェイニーは、自分のなかにある感情も思考も肯定的に受け止め、自分を満たすことができるようになっていく。

## V 超越する自己

祖母の幸福観を起点に自分自身の解放と自由へ、ジェイニーは旅をしたのだといえる。ジョーとの結婚も、ティーケイクとの結婚も自分を取り戻すために必要な通過地点であった。ジョーは白人と同じパワーを獲得しようと試み、その目標を到達する。白人のパワー獲得の方法は、相手からパワーを奪って自分のパワーにすることにほかならない。ジョーが建てた白い家は、ジョーの権力が白人のイミテーションであることの象徴であるといえる。その家に置かれたジェイニーはトロフィーワイフであり、中産階級にまでのしあがった黒人の成功を表すものにほかならない。そこではジェイニーは声を奪われ、自分の意思を表明することも、仲間と交流することも許されない。

ティーケイクのパワーはジョーとは異なるものである。相手の話を聞き、ともに笑うことによってティーケイクはリーダーシップを発揮する。ティーケイクとの結婚生活はジェイニーに新しい価値と新しい人間関係の可能性を示す。ティーケイクを通して、ジェイニーはアイデンティティの感覚、自分自身であることの意味、独立した自意識へとたどりつく。

しかし自分が欲するものが何であるかもわからない状態から誇り高い強い女性へとジェイニーが変容を遂げるためには、ティーケイクとも別れ、自分自身に拠って立つ状況が必要である。ティーケイクがジェイニーに暴力をふるう場面が一度だけあるが、それはジェイニーがティーケイクから独立するための伏線であるといえる。ティーケイクによって新たな生き方と自意識のあり様を知ったジェイニーが、物語のなかで最後に証明しなければならないことは、自分自身によって自分を満たすことができるということにほかならない。

ジェイニーは境界線のない身体と精神を獲得する。あらゆるものに一体化することができるという確信があるからこそ、自分に代わって、イートンヴィルに戻ってきたジェイニーに好奇の目を向ける町の人たちに、経緯を話してほしいとフィービーに託す。自分の物語がフィービーの口から語られるとき、ジェイニーとフィービーは一つになる。

“Pheoby, we been kissin’-friends for twenty years, so Ah depend on you

for a good thought. And Ah'm talking to you from dat standpoint.”(7)

ジェイニーの物語はフィービーにしか話せない物語であり、フィービーに話さなければならぬ物語であったといえる<sup>6)</sup>。

ジェイニーの物語は理想の発見から始まる。ミツバチと梨の花の一体化は言語化することのできない理想であり、どのように求めているかわからない理想であり、自然が見せる完全な調和であった。その調和を求めて、ジェイニーは配偶者をミツバチのように渡り歩く。ジェイニーもまた、フラワーが描いた適切な配偶者とともにいない女性の不幸を体験する。知的な刺激をまったくもたない退屈で現実主義的な最初の夫といっても、野心家で抑圧的なジョーといっても、ジェイニーは何一つ満たされない。単調で息のつまる生活にジェイニーは耐える。

ジョーの死に際に長年の抑圧への報復として恨みの長台詞を発するとき、はじめてジェイニーは声を獲得する。そしてティーケイクと出会い、ティーケイクを殺し、沈黙を獲得する。沈黙は服従ではなく、意志であることをジェイニーは知る。ティーケイク殺害についての裁判のあいだ、ジェイニーは沈黙する。司法のことばとも政治のことばとも交わることを拒否するジェイニーにあるのは沈黙という「ことば」にはほかならない。

ジェイニーにとってティーケイクはどのような存在であったといえるだろうか。ジェイニーに新しい価値の実践を示したのはティーケイクであるといえるが、ジェイニーはティーケイクと出会う前にすでにことばを獲得しているし、ティーケイクが死んでもジェイニーは元気で希望にあふれている。しかし、そうであったとしても、ティーケイクは重要な役割を果たしている。ジェイニーが求めるミツバチと花の調和の理想は、愛によってしか実現しないものであるからである。自立しながら他者の存在を必要とし、他者と一体化しつつ個であるという存在の方法を、ジェイニーはついに体得する。

それはエマーソンが語った超絶的な自己信頼の実現の一つのかたちであるといえないだろうか。フィービーにすべて話したあと、ジェイニーは就寝の支度を整え、黙想する。そのとき、ジェイニーはティーケイクを感じ、ティーケイクと一つであると感じ、そして「地平線をまとう」のである。

Then Tea Cake came prancing around her where she was and the song of the sigh flew out of the window and lit in the top of the pine trees. Tea Cake, with the sun for a shawl. Of course he wasn't dead. He could never be dead until she herself had finished feeling and thinking. The kiss of his memory made pictures of love and light against the wall. Here was peace. She pulled in her horizon like a great fish-net. Pulled it from around the waist of the world and draped it over her shoulder. So much of life in its meshes! She called in her soul to come and see.(193)

## おわりに

かたちのないものを想像し、いまだ実現しない理想を語ろうとするとき、人が利用できるイメージもメタファーも、それほど豊かに広がるものではないのかもしれない。すでに行われたこと、あるいはすでに知っているものを利用することによってしか、新しい価値観や新規の制度を提案するはできないのかもしれない。

このようなことを考えるのも、フラーとハーストンというまったく文化的背景も時代も、階級も、人種も異なる二人の女性作家が、それぞれの作品において理想的な女性の人生を描き出そうとするとき、ともに異性愛主義的な結婚をもちだすからである。最良の配偶者を得た女性こそ、その関係性において自己実現を果たし、自分自身の充足した人生を完結させることができるというのである。

フラーは湖水地方を旅行した紀行文という体裁をとる『湖の夏』で、自分にふさわしい配偶者を得ることができなかったがゆえに精神的に満たされず、心身のバランスを崩す女性たちの姿を描き、『19世紀の女性』では神話や伝説、小説などのフィクションに描かれた女性の生き方を論じ、理想的な夫婦の実現することができたゆえに「真実」の女性になりえたと説明する。ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』は、ジェイニーが結婚を経て自己解放を成し遂げたと描く。

それは二人の女性作家の「男」の知性の言説に対するレスポンスであるといえないだろうか。物質的な境界を超える精神を説き、自己信頼を最上の美德とする主体の条件が「男」であるならば、女性である地点から出発しなければならない者は、「男」を自己解放のメディアとして利用するほかない。「男」と一体化し、「男」の特権である知的な感性とことばを吸収し、そしてそのうち「男」から遊離すればよい。フラワーが説いた「女王」の座に、ハーストンは「王」抜きでジェイニーを座らせる。

ジェイニーが生活の心配をしなくてもいいのは、ジョーの残した財産という幸運があるからだが、そのことによって黒人の厳しい状況を描いていないと非難することもない。ジェイニーは十分に不幸でもあったし、どのような人にも不運と幸運は予期せぬ配分で注がれる。それを正面から受け止め、自分の位置を拒まず生きるジェイニーは、超絶主義の「真実」、つまり「神なる存在」を自分の目線のなかに見出したといえる。

異性愛主義に基づく結婚という不利なメディアを通して、「男」が主体を獲得する道筋とは異なる道程をたどり、ついに超絶的な「魂」をジェイニーは引き寄せる。フラワーの「女王」を超え、女性の解放がそこに実現する。それはエマーソンの自己信頼とは異なるかたちで実現した自己に対する穏やかな信頼であるといえる。

## 註

- 1) 辺境の旅を記した『湖の夏』は、作家そしてジャーナリストとしての大きな発展の機会をフラワーにもたらすものであった。このことについては拙論「女性旅行記にみる意識改革の軌跡：マーガレット・フラワー『湖の夏、一八四三年』」を参照していただきたい。
- 2) マリアナとフレデリカという名前は『19世紀の女性』にも登場する。『湖の夏』では辺境で出会った白人女性として描かれるが、『19世紀の女性』ではマリアナはゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の登場人物として、またフレデリカは実在の予言者として取り上げられる。
- 3) ハーストンは黒人のあり方を「エンバーム」しようとしたのだと岸は論じている(49-50)。文化人類学者になる道もあったハーストンであるが、

西洋の学問である文化人類学においては常に「都合のいい他者」でしかありえず、白人の観察者が踏み込めない黒人共同体に出入りすることができる点を評価されることにハーストンがジレンマを抱える状況は想像に難くない。師であるボアズと袂を分かち、学者ではなく作家になることを選んだハーストンは、黒人の声を父権的な学問のことばで語り直すのではなく、黒人の生活スタイルを体現しているともいえるティーテイクをそのまま「エンバーム」する。

- 4) ハーストンはイートンヴィルを出てからしばらく公的記録から消えるが、年齢を偽ってバルティモアの高校に入学し、成績優秀で、ハワード大学、バーナード大学で学ぶ機会を得る。そこでフランツ・ボアズの文化人類学と出会う。
- 5) イートンヴィルの設立者であるジョー・クラークと似た名前であることも興味深い。
- 6) ハーストンは 1970 年代になって注目を集めるが、ハーストンの人気はアリス・ウォーカーがハーストンの墓探しをすることによって火が付いた。『彼らの目は神を見ていた』は執筆された 1937 年ではなく、1970 年代が求めた物語であるともいえる。それはアリス・ウォーカーが必要とした物語であり、ハーストンがあることによってアリス・ウォーカーの文学が成立するともいえるのではないだろうか。

## 引用文献

- Emerson, Ralph Waldo. "Self-Reliance." *Emerson's Prose and Poetry*. Eds. Joel Porte and Sandra Morris. New York: Norton, 2001. 120-37.
- . "Woman." *American Transcendentalism*. Web. 6 November 2014. Print.
- Fuller, Margaret. *Summer on the Lakes, in 1843*. 1844. Chicago: U of Illinois P, 1991. Print.
- . *Woman in the Nineteenth Century*. 1845 New York: Norton, 1998. Print.
- Hurston, Zora Neale. *Their Eyes Were Watching God*. 1937 New York:

Harper, 2006. Print.

Kishi, Madoka. “‘To Embalm All the Tenderness of My Passion’: Zora Neale Hurston’s *Their Eyes Were Watching God* as an Allegory of Anthropology.” *The Journal of the American Literature of Japan*, No.8, February 2010. 39-56.

Thoreau, Henry David. *Walden: A Fully Annotated Edition*. Ed. Jeffrey S. Cramer. New Haven, 2004. Print.

Trubek, Anne. “Zora’s Place: To Understand Her, You Need to Understand Eatonville—and Vice Versa” *Humanities*. Nov/Dec 2011, Vol.32 Issue 6, 38-42.

伊藤淑子「女性旅行記にみる意識改革の軌跡：マーガレット・フロー『湖の夏、一八四三年』」野口啓子・山口ヨシ子編『アメリカ文学にみる女性改革者たち』彩流社 2010年 54-70.